

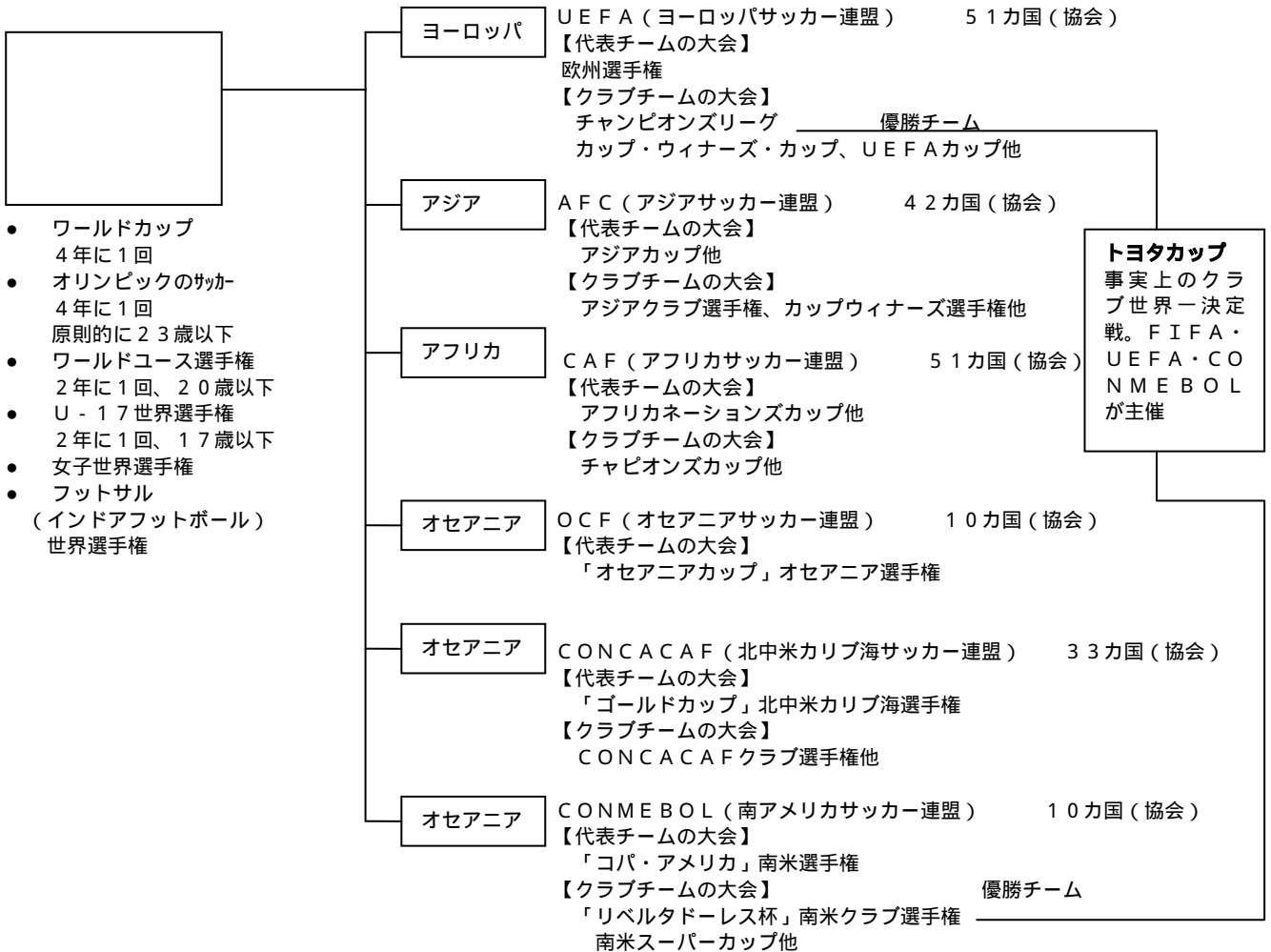
第7回研修 「ベガルタ仙台の歴史と今後」

日時 2003年4月6日(日) 13:30~15:20
場所 セルバ 5F セルバホール (仙台市泉区泉中央)
講師 宮城県サッカー協会 副会長 伊藤 孝夫 氏
受講者 12名



【 サッカーの歴史について 】

今日は、ベガルタ仙台以前の話をしてみたいと思います。皆さんはサッカーボランティアとして関わってきているわけですが、サッカーを専門にやってきたわけではないでしょうから、サッカーの歴史も少しわかっていただけた方がいいと思います。おさらい、ということで、資料(世界のサッカー組織と主な国際大会)を作ってみました。



<わが国のリーグ組織>

- J1リーグ (16チーム)
- J2リーグ (12チーム)
- JFLリーグ (16チーム)
- 東北リーグ(地域) 1部(8チーム)・2部(12チーム)
- 宮城県リーグ (8チーム)
- 宮城県地域リーグ (仙南・仙ク・仙実・塩釜・石巻・県北・大崎)

世界の組織は、野球と違って、FIFA(フィファ・国際サッカー連盟)が全て統括しています。野球だとアメリカの大リーグ、日本だとプロ野球・大学野球・高野連と言う風に、ルールも組織も違います。そういう意味でサッカーは、年代・性別によって、ボールの大きさが小さかったり時間が多少短いということがあっても、ルールはアマチュアであろうとプロであろうと、変わりなし、ということになっています。FIFAの本部が、スイスのチューリヒにあります。4年に一度、国の代表同士が対戦するのが、ワールドカップになります。これは、1930年に、第1回大会が開催されました。詳しくはまたの機会にするとして、その下にオリンピックのサッカーがあり、これも4年に一度あります。23歳以下、ただし、年齢をオーバーしても3人位までは入れていい、ということになっています。ですから、他競技だと、オリンピックが最高の大会だと思うのですが、サッカーはそうでないのです。次にワールドユースは20歳以下(U-20)、場合によっては19歳以下になりますが、若干変動があります。最近では中田(英)・小野はこれを経験した選手ということ。ちなみに、17歳以下(U-17)は(時には18歳以下となります)今年の9月に仙台スタジアムで、仙台カップが開かれますが、それがその年代です。ブラジル・イタリア・日本代表・東北選抜が戦います。昨年は13歳以下(U-13)の大会もあって、ベガルタユースの二人が出ていますね。ベガルタもトップチームの成績だけでなく、ユースも含めた形のクラブにしなければいけないし、そこから他チームに出たい選手が、移籍金をチームに持ってくるということもできるのです。マラドーナもス

ペインに行った時、移籍金を何億ももらって、出したクラブは彼の移籍金でグラウンドを作ったということです。子どもたちから、ジュニアユース・ユースといい選手を育てていくことで、クラブが潤うことも大事です。

それとは別に女子選手権もありますが、女子も年齢別になっていて、年齢制限のない女子選手権は、今年から予選が始まっていて、YKKの選手が一人出ています。去年の19歳以下(U-19)には、聖和学園から一人、常盤木学園から一人出ています。今度の新しいミッションでは、女子のフットサルにも力を入れていこう、ということになっています。現在、宮城のサッカー界は女子の方が男子よりも光っています。女子の全国高校選手権では、優勝が常盤木、準優勝が聖和ということでしたし、さらにYKKが一昨年のみやぎ国体の成年女子で優勝という結果を残しています。

このように、FIFAは地域(大陸)を統括する組織になっていて、ヨーロッパ・アジア・アフリカ・オセアニア・北中米カリブ海・南アメリカという6つのサッカー連盟が下部にあります。今ヨーロッパでは欧州選手権をさかんにやっています。ヨーロッパは51カ国となっていますが、イギリスは協会を4つ持っています。普通、1国に1協会なのですが、イギリスはサッカー発祥の地、母国ですから、イングランド・スコットランド・ウェールズ・アイルランドが独立してやってきて、FIFA以前から存在する歴史のある協会ということなのです。そこでルールを作りFIFAも作ったという歴史的な過程があったので、イギリスについては4つの協会を別のもので容認するということになっています。ワールドカップでイギリスが優勝したのはたった1回しかなく、この前のワールドカップでも、イングランドとアイルランドの2つが出場しましたが、これを4つの地域からいい選手を集めてきたら、まちがいなく勝てるだろうと思うのですが、歴史的な理(ことわり)があるのですね。ヨーロッパのサッカーの歴史は、地域の事情がからんで、なかなか難しいものがあります。西アジア(イラク)もそうです、宗教がからんできて、我々の状態では考えられないようなことがあります。

国が指定した選手(代表選手)を、他の国に行っている時は呼び戻して試合に出す、ということで、FIFAと所属チーム移籍の条件として、年に何回か以上は出なければならぬという規定があって、代表チームに戻っています。シーズン中だとなかなかそうも行かない時もある、中田(英)も、ワールドカップ予選(コンフェデ)の時にACローマのスクデッドに立ち会うため帰って、当時のトルシエ監督とケンカしたというのもありました。一方、国内リーグ戦、イギリス・プレミア、ドイツ・ブンデス、イタリア・セリエAなど、優勝チームの世界大会が1960年代に始まったのですが、ヨーロッパと南米だけが、他の地域サッカー連盟のおおの選手権より先駆けて行われてきたので、南米の優勝チームとヨーロッパの優勝チームの試合を、ホーム&アウェーでやっていました。ところが、アウェーでヨーロッパチームが勝ってしまうと、身の危険を感じるようなことが起きてしまい、そのようなことが3回続いて中止になったことがありました。そこで1980年代に治安の良い日本で、両方ともアウェーでのサッカーができるようにしよう、ということが始まったのがトヨタカップです。今のジーコ監督も2回来ています。クラブ世界を決める大会になって、だんだんとアフリカ・アジアでも動きが出てきたわけです。ワールドカップ出場国は、32の国と地域なのですが、南米は10カ国しかないのに出場枠が4、ヨーロッパは51の協会から12、アフリカは、51カ国もあるのに4、アジアは42協会でも4と今までの実績に基づいて、決められています。

【わが国のサッカーについて】

それぞれの国でリーグ戦、カップ戦がありますが、わが国のリーグ戦というのは、J1、J2、JFL、となっています。日本は昭和39年東京オリンピックに焦点を合わせてきたのですが、そのチームには現在のキャプテン、当時早稲田を卒業したばかりの川淵さんがいました。釜本・杉山選手がいて、たまたまグループ内でアルゼンチン・イタリアのグループだったのですが、イタリアにはプロの選手がいたため失格となりました。あの頃はアマチュアオンリーの時代でした、それでアルゼンチンと試合やって勝ったんですね、2-1でベスト8。この時にドイツのクラマーさんをコーチに呼び、日本のサッカー水準を上げるための指導を受けました。当時は全国社会人・天皇杯などのカップ戦しかなかったので、リーグ戦の必要性を訴え、40年に企業チームを主体とした日本リーグができました。日立・三菱・東芝...それが、Jリーグの基盤になっているのですが、唯一そうでなかったのが、読売クラブということになります。その次の43年メキシコオリンピックでは3位になりました。そして、日本リーグの中で、どうしても手詰まりの部分について日本サッカー協会の中で話し合わせ、63年、活性化委員会を作り川淵委員長体制で進められました。そこで、日本代表を強くするためには、底辺を強くしなくちゃならない、今までのように企業の中でのクラブではいけない。となると、どうしても、地域の中での行政・政界・財界の3者一体のチームを作るのがいいだろう、ということになったのです。そして、それから6年かかって平成4年にJリーグができた、ということになります。リーグの組織はJ1・16チーム、平成5年からはJ2・12チーム、平成11年からはJFL16チームとなっています。これには、ソニー仙台が入っています。JリーグはJ1とJ2に分かれる前は、Jリーグの下にJFLがありました。最初ブランメルに参戦した時は、そのJFLから入ったのです。ここには、女子のLリーグも入ってくるんですね。その下に東北リーグ(地域リーグ)があって、1部8チームと2部12チームに分かれています。1部には佐川急便東北・トーキン、2部には東北を南北に分けて、青森・秋田・岩手と宮城・山形・福島となっていて、宮城からは松島クラブ・中田クラブが入っています。それぞれ入れ替えもあり、宮城県リーグは8チームがあって、小野宏さん(VVN)が会長を務められています。その下に宮城県地域リーグとして、仙南リーグ27・仙台クラブ46・仙台実業団36・塩釜クラブ27・石巻リーグ14・仙台北リーグ20・大崎リーグ8があります。この他に大学・高校のリーグがあり、それがJリーグとつながっていて、同時に地域(県サッカー協会)・国(日本サッカー協会)につながっていて、東北サッカー協会は調整機関としてあるということです。この上にアジアサッカー連盟、さらに国際サッカー連盟となっています。そのような意味では、すっきりしているということです。

【仙台スタジアムの創設について】

では、ベガルタ仙台創設の裏話にいきましょう。平成4年7月前仙台市長石井にスタジアム建設依頼、となっていますがそれ以前に、平成3年の活性化委員会で、私が県サッカー協会の理事をしていた関係で、ぜひJEF(JR東日本と古河電工)のチームに、東日本管轄ということから、仙台に1万5000人収容できるスタジアムを作って欲しいといわれました。あまり上から言われてというのは好きではないので、順序を踏んで仙台市の教育委員会を通してと思ったところ、当然ノ

ーと言われました。そもそもスタジアムを作る予定ではいたのですが、せいぜい5000人規模のもの、ということだったのです。JEFも最初千葉に話に行った、その後仙台、さらに習志野という具合に頼んでいたが、最後の市原に決まったのです。その頃やっとJリーグも盛り上がり始め、平成5年5月15日に開幕しました。その年の3月、県サッカー協会にJリーグ対策委員会を作りました。その前年12月からの準備には前宮城県知事本間さんや当時の企画部長加藤さんなどが関わりました。仙台でもJリーグ作るんだということで、行政・財界とあってもどろろが実際動くのか、依頼があっても対策がないのでは困る、ということで、最初調査会社をお願いしてJリーグのチームが必要か、アンケート調査を行いました。是非必要が13%、あってもいい、ということと合わせると86.5%という結果でした。同じ調査をした福岡では75%ということだったので、これはかなりの数字だ、ということで、次に七十七銀行に頼んで、経済効果を試算してもらいました。財界を動かすには経済効果が一番ですから、で、年間26億円と出ました。グラウンドを含めると50億位になる、ということで財界に納得してもらいました。

開幕と同時に着々と準備を進めて、以前断られた経緯があったので、今度は石井市長のトップダウンで行くよう方向転換して、わたしと亀井会長とで泉を作るスタジアムを1万5000人にして欲しいと頼みました。市長は、ラグビーを中心に5000人規模のものを教委から造ると聞いている、それでいいじゃないか、と言われたのですが、サッカーでも、ラグビーでも、アメフトでも、何でもできるグラウンドにしたらいいじゃないですか、とお願いしました。Jリーグについても、100万都市、政令指定都市の仙台が、ステータスシンボルとして、プロのスポーツがないというのはおかしいんじゃないか、という風に話したら、そうだね、ということになったのです。だったら、地下鉄の南北線の駅も作るか、と言われて、ええっそれはやめてください、と驚いていいました。1万5000人入っても1度にはけるわけじゃないんです。以前ワールドカップスペイン大会を見に行った時、街中のスタジアムまでの1~2Kの道のりを、ワーワー騒ぎながら歩いているのを見ていたので、八乙女駅や泉中央駅から、スタジアムまで歩く途中、店に入る、活気が出る、そういうのもいいのではと話して理解してもらえました。そこで駅を作る金があるのなら、屋根をつけてくれと頼みました。最初は国立競技場だって屋根がないだろうと言われましたが、国立は昭和39年東京オリンピックの古代の物じゃないですか、と言って何馬鹿言ってるんだと怒られたものでしたが、それから1年位かかって市会議員にサッカーを見てもらったりして、平成5年6月22日の議会で、1万5000人収容屋根付きスタジアムが承認されたのです。その1週間後に市長が逮捕されたので、タイミングとしてはとても良かったということになります(笑)。そして、11月に宮城野原で、ジェフとヴェルディのJリーグの公式戦がありました。その時ものすごい雨で、はじまったばかりの頃はチケットをかうのが大変でした。新市長藤井さんも新知事浅野さんもハーフタイムに雨宿りにきて、マスクと話をしていました。その時私の本心としては1万5000人を2万人にしたいのですが、自分からはなかなか言えなかったで、マスクに言って欲しいと頼んだのです。こんなずぶ濡れになって見てくれるお客さんが仙台にはいるんですよ、1万5000人なんてとんでもないですよ、2万以上にしてくださいよ、と言ってもらった。その結果市長は次の日定例記者会見で、2万人以上みたいなことを言ってしまったらしい(後で問題になったそうだが)。本来はある程度、議会の承認を得てからしゃべらなくちゃならないのですが、市長もなったばかりで、前の日の光景を思い出して、つい、2万人と言ってしまったということなんですね。当時バブル崩壊のちょっと手前で、財政課長(現財政局長)をしていた佐々木さんが、2万5000人収容分の予算を取ってきました。それで図面も2万5000人として作っていたのですが、近隣の民家が日照権を主張されて、その結果2万人となって、更にバリアフリーの施設、障害者の席などを用意して、19694人となったのです。また、2万5000人の予算の余った分を活用して、大型映像装置をつけることができました。最初はつけてくれと言ったものの、当時は国立くらいにしかなくてなかなかつけられなかったものでした。あの頃は、電光掲示板でいいんじゃないか、という程度でしたが、しかし、今考えると、2万5000人の方が良かったのかなとも思いますね。

【チームの創設について】

グラウンドの用途については、今度はチームの番。仙台だけの大企業がないのでなかなか難しい状況でした。浦和・柏などは大きなバックがありますが、仙台では東北電力がある。しかし、電力は広域事業で1チームを支援することはできない、ということで、東北に一つ作ればいいのではないか、ということになりました。その時は山形県を除いて各県に頭を下げて歩きました。東北にJリーグを作らしよう、といて、12月に「東北にJリーグチームを設立する懇談会」がスタートしました。座長に仙台商工会議所会頭(前七十七会頭)の氏家さんに就任いただき、なぜJリーグチームが必要かという説明としてオーケストラを持つことと同じようにプロスポーツのチームを持つのだという話をしていましたら、河北新報の一人さんが遅れてやってきて、東北野球企業を作ったものの、準フランチャイズのロツテに逃げられてしまった、大相撲の準場所もやがてなくなるだろう、このままでは仙台にプロスポーツなんてできっこない、と言われました。河北さんはその後きちんと毎年お金をを出してくれるようになって非常に助けられました。それからというもの、商工会議所の中に事務局を無償で作っていただきましたが、県企画局長(前通産省)の加藤さんが直接やってきて、事務局長になってくれと言われて、サッカー協会理事長と兼務する形で関わりました。いろいろなことをやるには人が必要ということで、宮城県・仙台市・塩釜市・河北新報・東北放送・ミヤギテレビ・カメイから1名ずつ出向で社員を集めました。ミヤギテレビからは、サッカー協会の人を、東北放送は部長クラスをよこしましたが、改めてスポーツ報道関係で45歳前の動ける人を頼みました。系列であることから、河北の当時専務だった京極現ベガルタ社長が電話をよこして、どうして断ったんだと問い詰められました。じぶんで取材してじぶんで運転する行動できる人が必要なんだ、と答えました。河北には一高・東北大の後輩でサッカー部長だった渡辺さんが佐沼支局にいたので、どうしてもよこしてほしいと言って呼ばせてもらいました。カメイからはちょうど不在にしていた時に部長をきましたが、45歳以下で経理に堪能な人が是非必要だと言って7月まで待って来てもらいました。このようにして7人をこだわって集めたので、ブランメル当時の記録に7人の侍と表現されました。彼らと話をしていくうちに、いろんな問題が出てきましたが、グラウンドのことは、内部の力で対応でき、次に照明についてはサッカー協会理事をやっている石井さんのお父さまがかつて選手だったという経緯でやってもらいました。そして女子トイレ、数は良かったのですが、タンクのキャパシティが足りませんでした。野球と違っ

て、ハーフタイムにいっぺんに使用するの、作り直しました。我々が一番失敗したのは、審判の控え室から直接グラウンドに出られないということで、マスコミ関係の部屋とかは工夫し、練習場の風通しもうまくいったのですが、医務室を通らないと出られない構造になっているので、いずれ直してもらおうことにしています。

調査で多くの人が「Jリーグチームを望んでいる、ということ」を証明するために、署名運動をすることになりました。浅野知事が当選した時、32万ちょっと集まっている。それを目標にしようと思ったのですが、よく見ると複数書いているのもありましたし、中には福島県相馬市・山形市という人もいました。お金については、3年間で30億ということにして、県・市の議会に理解してもらえました。県は割と反応が良く、スポーツ議員の会などがあったのでよかったのですが、市は大変でした。県10億・市5億・財界15億という配分にして、時間をかけて市からオーケストラ・美術館など採算がとれなくても予算を出すでしょうと説得しながら、承認してもらいました。

チームの主たる部分は、やはり核となる大きな会社にもってらおう、ということで最初東芝にあたってみました。かなりいい感覚で、2年目まではお金も選手も出す、3年目からは地元でやってくれという条件でした。結局駄目になったのですが、同じ事を福島県もやるうとしており、宮城は東北電力からのアプローチ、こちらは郡山出身の福島県知事佐藤栄佐久さんを通じて、東京電力からのアプローチということで、同時に依頼を受けられないということから、東芝は両方断ってしまったのです。しばらくしてほとぼりが冷めて声をかけたのが、コンサドーレ札幌ということでした。だから、札幌は2年間は支援を受け、3年目からは現在の体制になっているのです。仙台では次にソニーに声をかけましたが、アメリカの映画会社に金を出しているということで断られました。現在もソニー仙台は、J1J2にあげない、ということ公言しています。それからカメイは、キリンの間屋になっているのであたってみたところ(キリンカップ2回仙台でやっているのはそういうつながりである。)キリンはサッカー全体のスポンサーと言うことで、一つのチームに肩入れできない、ということでした。次におらがまちのチームとして、地元で調達するしかない、ということで、東北リーグに入っていた、電力・中田・松島から選手を出してくれ、とお願いをしました。はじめ4つ位シュミレーションを作りました。まず、電力の選手をそのまま出向してもらおうなどあったが、結局は、東北リーグのチームを譲るという形で、多賀城のグラウンドも貸してもらい、選手を2年間休職扱いで来てもらいました。電力は仙台で女子のバスケットと男子のサッカー、秋田で男子のラグビー、新潟で女子のバドミントンを持っていたので、電力の選手は気の毒で、社員であれば5~6年サッカーを続けられたのに、プロになったら2年でクビを切られることになってしまったのです。(今でももうしわけなく思っています。)

県・市はなんとかお金を出してくれていましたが、仙台の財界はどうもうまくいなくて、立ち上げた方がいいが、社長はどうするのだ、となりました。いろいろのもめ事でもうやめてしまおう、というところまで来て、それから県でも慌てたようです。責任のある体制でということで、懇談会から代わって推進協議会となり、その応援団としての体制として団長を県知事がやるということで始まりました。余談になりますが、知事は自分の著書で、「96%は回転寿司、食べたいものじゃなくてもどんどん回ってくる、残りの4%が食べたいもの(じぶんで決めるもの)なのだが、ブランメル仙台なんかもそうだね、」と書いています。知事自身が、「Jリーグの理念に共鳴したということだったし、それでも決断しなければならなかったという切羽詰った状態であったということでしょう。」

平成6年8月に、新しい事務所を開くことになり、新しい名前をつけなければならない、ということで、公募して約200の中から、三女高の2年生の方が応募した「ブランメル」(イギリスの背広のデザイナーの名前で、伊達政宗の伊達男のかけたもの)が採用されました。次に社長が決まらないという中で、仙台には核になってくれる会社がない、ということで、岩手県盛岡市の東日本ハウスの社長の佐々木さんを県と河北で口説き落として引き受けてくれることになりました。2億500万、市と県が2億ずつ出して、電力が6000万その他3000万の出資で、ブランメル仙台が始まったのです。平成7年1月に、JFLの昇格を果たして、ブラジルから助っ人2人呼んで戦いました。しかし、1年で東日本ハウスが年間の協賛も、専務の出向も打ち切ってきました。最初年間10億くらいの40%は向こうで出しましょう、ということだったが、1年で赤字になったら引き上げてしまった。地元がやらないのに、どうして我々がやるのだ、という論理でした。仙台の財界が情けないと言われれば仕方ありません。JFLの2年目、赤字分については県と市が増資という形で肩代わりして、資本金を出してもらうには2月の議会の承認があるので、それまで七十七に頭を下げてつなぎ融資を頼んだりしました。それまでは赤字の度に増資してもらったが、もう駄目だということになって、県サッカー協会が間に入って話をし、「身の丈にあった運営」をすることでまとまりました。Jリーグ自体も反省し、かつてはプレミア並に国内の選手は1000万程度の年俵でいいだろうということでしたが、ヴェルディはジャイアンツもあるもんだから、プロ野球選手みたいに1億の選手を作ったのです。ある資格委員会でリストを見せられましたが、名は伏せてあるものの年俵1億の選手が何人かいて、30人目位で3000万、それ以下は大した事ないというところからスタートしてしまって、それを基準にして高く高くということになり、3~4年目でみんなガラガラと落ちてきた、ということなのです。リトパルスキーという億近い選手を呼んで、それがしわ寄せにもなっていました。これでは駄目だから、安い金でも選手に納得してもらって、うちの実態を話してそれでも良かったら来てもらう、という風にしました。平成9年6月に県の広域企業の社長(副知事を退職)松木さんに2代目社長に就任していただき、かつて商工労働部のときに関わった地元のカニトップのジャパンヘルスサミットから(今は1億2000万)当時1億をだしていただいた。Jリーグの空気もそのように身の丈経営になってきました。そもそも50年の歴史がある野球と対等に選手を呼んでくるというのがおかしかったのです。仙台スタジアムも完成して、年に5億位の予算で運営しようということになりました。その時すでに5億4000万の赤字があったのです。現在は、資本金23億2850万、県5億8200万、市5億4700万、東日本ハウスが2億500万ここまで大口、カメイ・電力が6000万、藤崎・河北・ユアテックが3000万です。出資会社は121社、東北ハンドレッドという名前には、大きな会社でなくても、もともと100の会社で集まればいっしょだろう、というこだわりがあります。

【これからの課題】

Jリーグは、皆さんもご存知のように企業の名前を使わない、ということで、ホームタウン制度を採用しています。

その他にプロの選手が何名とかいう条件があっても、121社から金を出してもらっているのは大きな財産かもしれません。平成11年からJ2が始まり、ブランメル仙台からベガルタ仙台に名称を変更しました。ブランメルの時、正式に名称登録をした時は、商標申請中だと情報を教えてくれないのですが、後から調べたら、2つ位すでに名前が登録されていました。イングランドの背広メーカーのこともありまして、グッズ開発の時に、いちいち名義使用料を払わなければならないので、何千万とかかる商標登録で懲りて、今度は秘密にしてベガルタ仙台にしました。七夕の星の名前、ベガとアルタイルからきています。赤字を出さないようになって、現在の京極社長になって、単年度黒字が出るようになりました。平成13年J1昇格ということで、平成14年は13位、13億5000万程度の予算だったのですが、結果的に20億近くになって、そのうち選手の補強に4億に回せました。それでも約1億の黒字となりました。今のところ負けなしの状態ですが、昨年が一番反則が多くて250万の罰金を払っています。ガンバ・エスパは反則金なし、警告78、累積退場5、一発退場3、ということです。技術が下手で抜かれたり、報復行為、審判に対する暴言は外国人に多いようです。サポーターも煽るのでなくやめろ、と言えるようになって欲しいと思います。そもそもサッカーに審判はなかったのです。イギリスのジェントルマンを養成する学校では、非紳士的行為をすることはない、という前提でやっていました。そのため、審判はいらなかったのです。その精神的なものも理解していかないといけない、ということです。

サッカーは文化ですから、文化として継承して行って、創造をしていくことが大切です。選手・地域・サポーターがそれをやっていかなければならない。ボランティア含め、サポーターが新しい創造に向かって、チームを変えていくことも必要かもしれません。

【文責 小野 枝美子】